

和歌山県立医科大学医学部
眼科卒後後期研修プログラム

1. 一般目標

眼科疾患には眼科特有のもの以外に、全身状態との関係が濃厚である疾患も存在する。したがって、眼科医として眼科特有の疾患のスペシャリストの養成以外に、眼科以外の領域に対する知識を身につけ、他の診療科との連携に重点を置いた研修プログラムを実践する。

個々の患者の病態を把握し、それに基づいた治療を選択する知識と技術を習得することを目的とする。外来・入院・手術症例とも多く、卒後臨床研修を行うにあたって絶好の条件を備えている。和歌山県立医科大学附属病院眼科では、教員医師はすべての眼科疾患に対して高いレベルで対応できる体制を備えていると自負している。全人的医療態度を学ぶことは当然であるが、さらに眼科的目標としては以下の点を重視する。

- 1) 眼科診療全般の知識を身につけ、各種の眼科特有の検査のための技術を習得する。
- 2) 眼科特有の緊急を要する患者の初期治療に関する臨床能力を身につける。
- 3) 頻度の高い眼科疾患および全身疾患に関連する疾患の診断・治療に必要な基本的知識を習得する。他診療科との連携医療に重点を置く。
- 4) 2) と 3) の中でも、近い将来に眼科スペシャリストとして、各種の手術に携わるための基礎的知識と技術の習得に重点を置く。

2. 行動目標

2-1 診察法・検査・手技

1) 医療面接と病歴の記載：全身疾患を考慮しつつ、眼科特有の疾患を理解した上での的確な病歴の聴取ができることを目標とする。

2) 眼科診察に必要な基本的診察

眼位、眼球運動、眼振の有無、瞳孔、対光反応についての診察

細隙灯顕微鏡により前眼部～中間透光体の観察、記載

単眼、双眼倒像鏡を用いて眼底観察

眼圧測定

3) 基本的な臨床検査

視力、屈折検査

視野検査についての理解

蛍光眼底造影検査、ICG 造影検査の施行と所見の理解

超音波検査：眼軸長測定（A モード）、網膜硝子体の観察（B モード）

放射線学的検査：頭部、眼窩部の X 線、CT、MRI 検査所見の理解

B. 基本的治療法

- 1) 眼科疾患に対する薬物療法（点眼、内服、静脈内投与）で用いられる薬物の作用、副作用、相互作用を理解し、処方する。
- 2) 年齢と病態に応じた屈折、調節矯正を眼鏡、コンタクトレンズで対応する
- 3) 内眼手術の術前後の投薬、処置を的確に指示できる。
- 4) 顕微鏡下で結膜、角膜、強膜の縫合を行えると同時に基本的な前眼部手術が行える。

C. 経験することが必須であると考えられる症状、病態、疾患 眼科での研修の目的は、患者の呈する眼症状、身体所見、眼局所所見と眼科検査所見に基づいた鑑別診断、初期治療を適切に行う能力を身につけることにある。全身疾患が関係する眼疾患では、他診療科との連携を滞りなく行えることを目指す。眼科特有の疾患と平行して、他診療科でも 1 次救急的に経験する可能性の高い疾患の初期対応能力の習得に重点を置く。

- 1) 頻度の高い主訴：視力障害（低下）、充血、眼脂、眼痛、流涙、異物感、視野狭窄、飛蚊症、羞明
これらは眼科外来できわめて頻度の高い主訴であり、これらの主訴に対して必要な検査を選択し、正確な診断をする能力を習得する。
- 2) 救急疾患として緊急の対応を必要とする眼科関連の主訴、症状・病態
アルカリ角膜火傷などの化学外傷の診断、初期緊急処置、治療ができる。
角結膜異物の除去ができる。
眼瞼切創、裂傷の縫合治療ができる。（全身外傷を伴う場合は、頭部や腹部、胸部外傷など他科との連携を滞りなく遂行する）。
穿孔性眼外傷の初期診断と患者、家族での初期対応と治療の準備（手術担当医への的確な報告と手術の準備）ができる。
眼部の鈍的外傷の 1 次対応、眼科一般診察、画像診断ができる。
急性閉塞隅角緑内障発作の診断と初期治療（レーザー虹彩切開を含む）ができる。手術室での手術が必要な状態を的確に把握できる。

3) 一般眼科診療として経験（診断と治療）が求められる疾患、病態
屈折異常（近視、遠視、乱視）、斜視、弱視の診断と適切な屈折矯正治療、手術
適応の判断
角結膜疾患（角膜びらん、角膜潰瘍、結膜炎）の診断と適切な薬剤投与
白内障の診断と手術適応症例の決定
慢性緑内障（開放隅角、閉塞隅角）の診断、適切な薬物治療、および手術適応
症例の決定
糖尿病、高血圧、動脈硬化による眼底変化の的確な診断と適切な治療方法の選
択。糖尿病網膜症では、レーザー網膜光凝固の施行技術の習得と手術適応症例
の判断
眼窩、外眼部、涙器疾患（内分泌疾患、感染、腫瘍、先天性疾患）の画像診断
と治療方法の判断

3. 指導体制

病棟入院患者を担当し、指導医のもとで診察能力、診断能力の向上を目標とする。必要時には、さらに上級医師の指導を受ける。手術患者では、患者、家族に対するインフォームドコンセントを得るための説明を指導医と共に行い、手術室では執刀医および指導医のもとで、手術介助を行い、基本的術式を理解する。単独で術後管理が可能になることを最終目標とする。近い将来に眼科スペシャリストとして、各種の手術に携わるための基礎的知識と技術の習得に重点を置く。さらに、知識、技能の習得に努めると同時に、問題点を見過ごさず、指導医の指示を仰ぐ。夜間、時間外の緊急患者、緊急手術、緊急検査には可能な限り立ち会う。

4. 週間スケジュール

	午前	午後
月	外来診療 手術	手術
火	外来診療	専門外来（緑内障、日帰り白内障症例検査）、教授（講師）回診
水	手術	手術
木	外来診療	専門外来（斜視、網膜硝子体）、眼底造影検討会 教授（講師）回診
金	外来診療	専門外来（コンタクトレンズ、義眼、黄斑疾患）

5. スタッフ

教授 雑賀司珠也（日本眼科学会認定専門医）

講師 岡田由香（日本眼科学会認定専門医）

白井久美（日本眼科学会認定専門医）

宮本武（日本眼科学会認定専門医）

住岡孝吉（日本眼科学会認定専門医）

助教 小門正英（日本眼科学会認定専門医）

藤田識人（日本眼科学会認定専門医）

友寄勝夫

学内助教 石川伸之（日本眼科学会認定専門医）

泉谷愛（日本眼科学会認定専門医）

井上晃宏

高田幸尚

溝口晋

博士研究員 藤田周子

当眼科では、臨床業務に加えて、教員スタッフ全員が研究室で実験的研究にも積極的に取り組んでおり、希望者は指導者とともに、臨床業務の終了後と指導医の研究スケジュールに合わせた形で臨床の理解と新しい治療方法の開発につながる研究に参加できる。研究遂行者は筆頭演者として学会発表し、筆頭著者として論文執筆ができるように指導する。

当教室は、臨床および基礎研究報告で国内、海外の学会で数多くの研究発表を行い邦文、英文論文を毎年提出している。指導スタッフ一同は高いレベルの指導のもとで、優秀な眼科医師を育成できる環境であると考えている。

常に多くの症例を経験でき、教室をあげて専門医取得を支援している。日本眼科学会専門医認定試験の受験資格として、5年以上の眼科臨床経験を積み、眼科に関する論文発表1篇以上、外眼手術・内眼手術・レーザー手術が執刀者として20例以上を要求している。また、眼科臨床に必要な基礎的知識、診断技術、治療手技の習得はもちろん、医の倫理や医療に関する法律を身につけ、臨床医に求められる基本的な診療に必要な知識、技能、態度を習得することが必要である。当眼科学教室では、これらの条件を十分に満たす研修ができる。とくに日本眼科学会専門医認定試験の受験資格を満たす手術執刀件数は、教室の研修指導項目の最重要課題の一つとして位置づけられ、実践されている。

最後に。

以上が当眼科学教室の卒後後期臨床プログラムである。将来を担う眼科スタッフを目指すものとして、レベルの高い臨床能力、技能、幅広い知識を習得し、全人的医療態度を身につけるにあたって、当教室での卒後後期研修を選んで間違いないと自負する。